

機織る伝道者―外村吉之介論

神 田 健 次

は じ め に

作家の司馬遼太郎が、かつて倉敷を訪れた時のことを、「倉敷・生きている民芸」という随想に書いているが、その中で、「館長の外村さんは、手織木綿の着物にモンペという姿でハタオリ機にすわり、梭を飛ばして織物を織っていた。一動く博物館とはここだけじゃ。というのが外村館長の自慢であった。手足を動かしながら、見学者たちに民芸理論を教えていた」と、「日本における最古参の民芸運動家」外村吉之介について紹介している⁽¹⁾。昭和初期に柳宗悦と出会い、外村吉之介は牧師として民芸運動に参加し、戦後は倉敷民芸館や熊本国際民芸館の館長などの働きを通して民芸運動に大きな足跡を残してきたにも拘わらず、これまでキリスト教界においてその思想と実践について殆ど正当に評価されることがなかった⁽²⁾。本稿では、つとめて一次文献に即して、外村吉之介の伝道者に献身するまでの道、機織る伝道者としての働き、沖縄の民芸との関わり、そして戦後の民芸運動における指導的な歩みをめぐって、その思想と実践を究明することを意図している。

【1】献身への道

1898年9月27日、外村吉之介は、滋賀県で生まれている。家は、麻問屋であったが、彼が幼少時に倒産し、貧困を経験することになる。その中にあっても、「家は父が他人に騙されて財産を失い、貧乏しておりましたけれども、俳諧の宗匠であった父は貧を心につけず『粗食を食らい水を飲み肱を枕として臥する

機織る伝道者―外村吉之介論

も楽しみもまたその内に在り。不義にして富み且つ貴きは我に於いて浮雲のごとし』という古語をよく暗誦しておりましたので、子供の私にもそれが身に沁みて、長ずると共に、無所有の清貧を憧れるようになりました」⁽³⁾と、父の精神的影響について後年回顧している。

学校を卒業（旧竜田商業）後、仙台と大阪の商店で勤務しているが、大阪で働いている時、内面的な問題もあって日本メソヂスト大阪両国橋教会に通うようになる。大阪両国橋教会は、当時釘宮辰生牧師が牧会しており、大阪のメソヂスト教会では最も規模の大きい教会であった⁽⁴⁾。その両国橋教会において、外村が23才の1921年の秋、釘宮牧師より洗礼を受けている。さらに翌年、勤務の都合もあって神戸に移ったのを機に、日野原善輔牧師の牧する神戸中央教会に転入会し、そして伝道者への献身の思いを与えられ、関西学院神学部に入學したのが23年の春であった。

その当時の神学部の教授陣について、外村は、「曾木銀次郎、松下積雄、亀徳一男先生がおられ、T. H. ヘーデン先生が学部長でした」⁽⁵⁾と述懐している。『神学部要覧』（1929年、昭和4年）によれば、曾木銀次郎が教会史、松下積雄が新約釈義とギリシャ語、T. H. ヘーデンが新約緒論及び釈義を担当しているが、亀徳一男はまだ就任していなかったのも思い違いと思われる。なお、その他専任の講義担当者としては、堀峯橘が教会政治学と牧会学、W. J. M. クラッグが旧約釈義とアポクリファ、H. W. アウターブリッジが組織神学と比較宗教学、窪田学三が旧約緒論及び釈義、旧約神学、H. B. ジョーンズが社会学と基督教倫理学、松田明三郎が旧約釈義とヘブライ語、原野駿雄が聖書概論と新約釈義があげられる⁽⁶⁾。また当時の神学部の状況について、例えば1924年度の学部長報告では、全学部生が56名在籍し、学外からユニオン神学校のH. F. ワード博士の「キリスト教と新しい社会秩序」、日本メソヂスト教会の鶴崎監督の講演会など活発に開催していることが報告されている⁽⁷⁾。

このような当時の神学部に進学しながら、しかし外村は必ずしも積極的に交友関係を広げ、勉学に打ち込んでいたわけではなかった。学生時代について、「私が神学校（関西学院）にいたころは、白状するが真に恥かしい思想生活に

固着していた。私は強い個人主義に執して、学校の団体生活には眼もくれないでいた。而して私は神を犯す傲慢を以て自我にたよっていたのである。元より私は神学校に居りながら献身していない矛盾の中にあつた。しかし、神は一度とらへたものをはなしたまはなかったのである」と、述べている⁽⁸⁾。当時の彼の関心は、日本の文学や芸術に強く惹かれていた様子が、「在学中芸術への愛が湧き、国文学に心をひかれたが、殊に万葉集やアララギ派の作家達に傾倒し、一方又古美術や仏像に心を寄せ、京都や奈良の寺々を殆んど残りなく巡礼した」という回顧に窺える⁽⁹⁾。1926年3月、外村は神学部を卒業しているが、伝道者への献身の思いが十分ではないと判断し、京都基督教青年会（YMCA）の宗教部主事として、新たな歩みを始めている。キリスト教の精神を背景として多彩なプログラムを地域社会に提供する YMCA の働きの中で、地道な宗教部のプログラムを展開しているが、とりわけ土曜礼拝の実施や京都基督教青年会神学校の開設などは、外村の働きとして特徴的なものと言えるであろう⁽¹⁰⁾。

京都 YMCA の時代、外村にとって生涯を決定するような大きな出会いを経験することになるが、その出会いについて、外村は、『民芸遍歴』の「あとがき」の中で、次のように叙述している。「晩学であつた私は、近世思想のめざめもおそく、大正の中ごろにようやく個性の発見に喜び勇み、マックス・スチルネルの『自我経』に興奮して、自我が人生の中心だと信じて動いていたのである。しかし、個人主義の誰もが経験したように、個我の力量の限界を感じ出すと、身辺が崩れて絶望の淵が迫ってくる思いを避けることは出来なかった。それでも私は、なお小さな個我にたよる恣意独善の世界さまよいながら、深淵から目をつぶとうとしていた。そういう時に、私はカール・バルトの危機の神学と、柳氏の『工芸の道』に触れた。前者は雷のように強く私を撃ったが、後者は慈雨のように優しく私を包んだ。それらはともに、近世の浪漫主義に対する激しい批判であり、甘い自己陶醉を打破る警鐘であつた。私は回心した。ことに、柳氏の工芸の道によって、私は真の地上の道を見出し、突如として古代や中世へ、わが家へ帰るように帰った」⁽¹¹⁾。

ここで、「マックス・スチルネルの『自我経』」と言われているのは、19世紀

機織る伝道者—外村吉之介論

前半に活躍したドイツの哲学者マックス・スティルナー (Max Stirner 1806—56) の代表的な著書 *Der Einzige und sein Eigentum* 1845 を指している。通常、『唯一者とその所有』と訳されるが、外村が手にしたのは1921年に辻潤によって『自我経』と翻訳されたものであり、スティルナーはこの著書で、ヘーゲル左派のフォイエルバッハとバウアーから出発し、神や教会や国家などの権威を否定する極端なエゴイズムを主張している。例えば、「自分は自分の力の所有人である。それは自分が自分自身を無二として知る時にのみそうであり唯一者に於て、所有人彼自身は彼の創造的虚無に帰へる、其処から彼が生まれて来る。自分以上の一切の本質は、それが神であれ、人間であれ、悉く自己の唯一性の感情を薄弱にする、そして、それはこの自覚の太陽の前にのみ蒼白くなる。若しも自分が唯一者たる自分自身の為に自からを干渉するならば、その時、自分の干渉はその刹那に変はる、具体創造者の上に安住し、創造者は彼自らを消費して、自分は万物は己にとって無だ、と云ふ得る」⁽¹²⁾といった箇所には、彼の〈自我経〉とも呼べる思想がいかに表出されている。このような個人主義を謳歌してやまないスティルナーの思想に魅了されながらも、しながら他面その行き着くところ、「身辺が崩れて絶望の淵が迫ってくる思い」に苛まれた苦悩を、外村自身告白している。その苦悩の直中、天啓の如く与えられた二つの決定的な出会いがあったと語られ、一つは「カール・バルトの危機の神学」であり、他は「柳氏の『工芸の道』」にほかならない。

カール・バルトは、20世紀を代表する神学者で、1919年の『ロマ書』において、人間の側から神に接近しようとするシュライエルマッハーやリッチェルなどの近代神学の試みを根本的に否定し、神と人間との質的断絶を主張した。絶対的他者としての神が、有限の人間にどのように危機的に関わるのか、その逆説的な関係を弁証法をもって解明しようとしたことから、「危機の神学」あるいは「弁証法神学」とも呼ばれている。まだバルトの著作が翻訳されていなかった時代に、どのようにバルトの神学思想に触れることが可能であったかについては、前述の京都基督教青年会神学校に講師として呼んでいる同志社大学神学部教授の魚木忠一の講義を通してバルトの思想に出会ったと言えるであろう。

う⁽¹³⁾。魚木は、既に1927年に『基督教研究』に「近世新教神学思想発展の一考察」という論文を掲載し、バルトの神学に言及し、その神学の新しさについて、「我儚な、気まぐれな、漠然とした、人間と神との区別を知らない不謙遜な体験宗教に反対した処にバルトの新らしい味がある。深刻に考へると人間は神を体験し得ないものである。その体験し得ない神を体験するのが基督教である。人間が無になった時に初めて神があらはれ給ふ。人間がNoとなる時に神のYesがあらはれる」⁽¹⁴⁾と、述べている。このバルトの思想の衝撃に出会い、外村は自らの近世の浪漫主義的な「甘い自己陶醉」が打ち砕かれ、「栄光唯神に在れ」とする回心を経験したのである。

バルト神学との出会いが「雷のように強く私を撃った」のに対して、もう一つの柳宗悦著『工芸の道』との出会いは、「慈雨のように優しく私を包んだ」と語られている。柳の『工芸の道』は、彼の民芸理論の中でも最も基礎的で、重要なものであり、キリスト教神秘主義に基づく宗教哲学的考察をその背景にすえている著作である。例えば、次のようなくだりに、その点が鮮明に表現されている。「かく想へば工芸にも数々の福音が読まれるではないか。その美が教へるところは宗教の言葉と同じである。美は信であると云ひ得ないだらうか。正しき作を見る時、そこにも説くなき説法が説かれている。一個の器も文字なき聖書である。そこにも帰依や奉仕の道が説かれている。救の教も読まれるではないか。此の蕪雑な現し世も美の訪れの場所である。そうして下根の凡夫も救ひの御手に渡さるる身である。何人にも許さるる作、誰もが用ひる器、汗なくしては出来ない仕事、それが美の王国に受け取られるとは驚くべき此の世の神秘ではないか。それは美によって義とせらるる神の王国を地上に示現しようとの密意である」⁽¹⁵⁾。

1928年9月、京都基督教青年会神学校における連続宗教講演「神に就て」の打ち合わせのため、外村は初めて京都の神楽丘にある柳の家を訪問している。

『工芸の道』との決定的な出会いに触れ、次のように「民芸の父を訪ねたころ」の中で語っている。「先生は去年の春から、雑誌『大調和』に『工芸の道』を連載された。それを読んで私は強く刺激されたので、感銘はまだ新しいままであ

機織る伝道者―外村吉之介論

る。当時口絵に紹介された民芸品も、見覚えのある姿でそこここに置かれているので、非常になつかしかった。私はあの論文を感激をもって読んだことを言い、お陰で久しい個性主義を根底から覆されました。以前になにかの中で、『名も無い職人が作った徳利などの真実の美がある』とお書きになっているのをきかせてくれた友達がありましたが、当時個人作家に心酔していた私は、それを軽々しく聞き流して一種の英雄的な気持ちで、個我の力量に執着して通してきました。しかし、自己忠実は独善となり、やがて虚無にまでなり切っていましたときに、去年はあれで、まったく惨めな自分の足場を凶星さされて、ほんとうに降参しました。私にとってだけでなく、近世の思想や信仰にとって非常に啓蒙的な論文だと思います」⁽¹⁶⁾。K. バルトの神学とあわせて、このような柳宗悦の『工芸の道』との決定的な出会いによって、外村は新たに伝道者として生きる道を指し示されたのである。

【2】機織る伝道者

〈山口教会時代〉

バルトの神学と柳宗悦の『工芸の道』との出会いによって、伝道者への決意を与えられた外村が、最初に赴任した教会は、日本メソヂスト山口教会であった。山口教会に伝道師として着任したのは、1929年4月であり、彼が31歳の時であった。赴任した年の10月、外村は、同志社女子大学で柳宗悦の教え子でもあった竹本清子と結婚している。山口教会では3年間伝道と牧会に従事しているが、彼が意欲的に取り組んだ成果として、教勢が伸展し、2年目の教会創立40周年記念には自給教会に成長している。日本メソヂスト教会年会記録によれば、「外村吉之介兄の第二年目なり教会は健実に発達し本年創立四十年を記念として自給教会に進級す教勢益々熾なり、受洗者一二、礼拝五二、夕拝二〇、祈禱会八」⁽¹⁷⁾と、報告されている。

山口教会時代には、民芸運動への参与はまだ本格的なものとは言えないが、ただいくつかの点で積極的な関わりを模索している状況について窺い知ることができる。まず最初に、新たに創刊した教会報『高き櫓』において、宗教と民

芸に関する柳宗悦の文章を掲載したり、柳宗悦や河井寛次郎、あるいはキリスト者で民芸運動に関わっている湯浅八郎や村岡景夫などと積極的に交遊している記録を掲載している⁽¹⁸⁾。また山口で菱川精一が編集刊行している『福音と思想』という月刊誌に、意欲的にキリスト教や民芸をめぐる随想を寄稿している。とりわけ、仏教とキリスト教の鐘を比較して考察した「鐘について」、柳宗悦の『工芸の道』を中心に民芸の思想とキリスト教について論じた「美について——一つの懺悔録」などは、この時期の外村の思想的状況を知る上で貴重な文章であろう⁽¹⁹⁾。

さらに、教会の聖餐台や献金台用の小卓と花瓶台の図案と監督を柳に依頼して作成していることがあげられる。教会報『高き櫓』で、「聖案と花瓶台 聖案は朝拝の献金台、夕拝の講壇、聖餐式の聖餐台、洗礼式の洗礼盤台として用ふるもの 図案及監督 柳宗悦氏 制作 鳥取市にて 右二個を聖堂に献げたし」と、献金が呼びかけられている⁽²⁰⁾。現在でも教会で大切に使用されている柳宗悦の図案による小卓と花瓶台は、プロテスタント教会において教会建築に関する関心が乏しかった時代の作品として注目すべきであろう。

もう一つこの時期に着目すべき民芸運動に関わる出来事は、日本メソヂスト教会西部年会が朝鮮の「京城」で開催されたのを機に、柳より紹介されて浅川伯教・巧兄弟と朝鮮民族美術館での李朝の民芸に出会っていることである⁽²¹⁾。朝鮮の民芸を愛し、人々に尊敬されて朝鮮の土となったキリスト者浅川巧の思想と行動については既に論述したが、その浅川兄弟と朝鮮の民芸との出会いは、外村自身の民芸理解の広がりや深さをもたらすものとして重要な意義をもつ経験であったと言える。『高き櫓』では、「緝敬堂には浅川伯教氏の案内をえて柳先生たちの朝鮮民族美術館の陳列を見た。名もなき民芸に対する愛と広い蒐集におどろく。……京城郊外清涼里に浅川巧氏をたづねた一日は恵まれた日であった。温突の上で温い朝鮮生活の味を十分に味はひもした。浅芹洞の浅川伯教氏の御宅に上ったことも嬉しかった。浅川御兄弟には甚く御好意をうけた」⁽²²⁾と、その豊かな出会いの経験が報告されているのである。

機織る伝道者―外村吉之介論

〈笠井講義所時代〉

このような民芸運動との積極的な関わりを模索する中で、外村は、民芸の世界に具体的に携わりたい思いを膨らませてゆく。最初は、焼き物をつくる陶工の道を希望し、柳に相談するが、焼き物を始めるには年齢的に難しいこともあり、むしろ織物の世界を始めるよう助言を受ける。しかも浜松の近くで織物を指導する平松実を柳から紹介される⁽²³⁾。

外村が山口教会を辞し、1932年4月に日本メソヂスト笠井講義所に赴任した背景には、このような外村自身の民芸運動に対する抑えがたい具体的参与の思いがあったのである。静岡部中遠教区に属する笠井講義所の牧師として、横須賀、森、山梨の三出張所の責任を負っていた。当時のメソヂスト教会においては、「講義所」は規模として「教会」になる以前の段階で、この笠井講義所に二年間伝道・牧会に専念しているが、その働きについて、年会記録は、「西ヶ崎、笠井講義所 外村牧師の牧会に依り漸次進展して来たが伝道は中々困難である、外村牧師は伝道の傍手工業を為し其利益を教会に献げて居る、教勢は振て居ると云ひ難きも順調である、財政は比較的良好で本年も諸経費を完全に支弁して尚ほ剰余を生じて居る」と、報告している⁽²⁴⁾。ここで「伝道の傍手工業を為し」と記されているのは、新たに着手した織工としての仕事を指している。

浜名郡積志村西ヶ崎に教会と土蔵を改装した仕事場をもち、宗教と工芸の接点として農村への伝道を担うということは、外村にとってかねてからの夢の実現であった。柳宗悦より甥にあたる柳悦孝の精神面も含めた指導を託され⁽²⁵⁾、彼らは毎日浜松の平松家へ通って、織りの手ほどきをうけたが、近所にも多くの機織りの経験者がいた。この地方は古来遠州縞という庶民の木綿の普段着を何百万反と織り出しつづけた土地である。機道具も機大工ものこっており、この大工たちは早くから、構造にも機能にも、また形にも秀れた機具を作りつづけていたのである。

民芸運動を早くから深く理解し、支援してきた式場隆三郎は、この西ヶ崎の教会工房について、次のように叙述している。「浜松から二俣行きの電車に乗って、積志村の西ヶ崎で下車した人は、そのすぐ前のささやかな家に日本メソジ

スト教会という標札を見出すであらう。以前は何か他の事務所にでも使はれていたらしいその平凡な教会を訪れた人は、小さなオルガンが一台据えられて居るのみで祭壇はない、回廊のある畳の座敷を見て、一般の教会らしい所の全くないことに気づくであらう。然し二階へ上ればそこに並ぶ美しい古民芸品の数々に迎へられて、そこに住む牧師がただの人でないといふ愕きを感じるに違ひない。更に階下の小さな板の間へ行けば数台の小機が据えられている。愕きを増しつつ裏庭へと廻れば、種々な植物染料を湛へた大壺が列んで居り、その奥にある倉からは機を織る音が絶えず聴えて来る。倉の戸を開けば、中にはあのゴッホが無数に描いたフランドルの田舎の機織場のやうに、ランプを吊した下に数台の手織が据えられて、二人の男が一心に箴をたたいて、美しい織物が織られている。それは教会の牧師外村吉之介氏と柳悦孝氏である。教会の平凡さに愕いた人は、今度は何処の教会にも見られない奇異な光景に接するであらう」⁽²⁶⁾。

1933年秋、京都の大毎会館で芹沢銈介、柳悦孝、外村吉之介の三人の染織新作展が催され、そして34年には外村は国画会工芸部会員に推薦されている。

〈袋井教会時代〉

1934年、外村は日本メソヂスト袋井講義所に赴任している。笠井講義所と同じ静岡部で、この年牧師としての按手礼を受けている。例えば、1935年の日本メソヂスト教会年会記録によれば、「袋井講義所 外村吉之介兄新任して教勢発展を示し、出張所の集会も良好なり。本年は資格進級を期して努力せられつつあり。受洗者九名。青年信徒はよく教会の為めを尽しつつあり。外村兄は農村伝道に特殊の才能と熱誠を有する人、今や其特長を発揮して働かれつつあれば其成果は刮目して見るべきものあるべし」⁽²⁷⁾と、農村伝道に特別の賜物を発揮する伝道者外村の働きが描写されている。外村は、日本メソヂスト袋井教会の牧師としては1941年の日本基督教団成立にいたるまで、そして日本基督教団袋井教会の牧師としては終戦まで、計11年間教会の責任を担っている。

袋井に移ってから教会の牧師として伝道・牧会に携わりつつ、新たな民芸

機織る伝道者―外村吉之介論

運動への関わりを一層深く探ってゆく。柳悦孝は、新たな場へ移って行くことになるが、教会堂の側に二間×五間の仕事場を建て、そこで本格的な織物に着手している。この袋井教会工房でも、習う人が増え、その指導にも追われることになる⁽²⁸⁾。

織物作家としての外村にとって、この袋井で最も重要な展開は、すぐ近隣の掛川における葛布との出会いによってもたらされた。葛布については、文書として吾妻鑑や平家物語等に多く見出されるもので、江戸の元禄時代にはその流行を極め、民家の暖簾や座布団地に、夜具地や夏の襦袢にも広く用いられた。明治時代以降、次第に衰退の運命をたどることになるが、その美しさと用途の可能性について、外村は、「掛川の葛布」という文章の中でつぎのように描いている。

「現在掛川で作られて居る葛布は輸出壁紙、襖紙用の外は作られて居ない。然るに昔の縞物を見ると云ひ難い美しさがある。葛布は絹の光沢には及ばないかもしれない。然し独特な植物性の光彩を有って居る。麻布のやうな強靱さはないかもしれない。然し更に硬直で、新鮮である。木綿の温さは保たないかもしれない。然し木綿に比して毛立たず、水湿に浸されない。葛布を今日の用にもっと活かす途が多々ありさうだ。暖簾やカーテンに、座布団に、表装に、装釘に、掲げた二つの見本は其の試作である。上下とも経糸は木綿糸、緯は赤糸の外は全部葛苧である。野草らしい光沢、触り、張りが一つの親しみを有って居る。そしてフレッシュである。灰汁で洗へば保ちは随分よい。掛川の新しい仕事となるやうに望んで居る」⁽²⁹⁾。

1936年10月に催された日本民芸館創立開館記念「第一回新作工芸展」に河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉、芹沢銈介、川上澄生、棟方志功、柳悦孝ら同人と共に外村は作品を出品し、以降、毎年続いている。また43年2―3月には、日本民芸館で「外村染織展」が開催される。さらに雑誌『工芸』の49号から60号の表紙も引受けたが、38年には、古作品に倣う無地物、縞物103点を貼布し、本文をつけた『葛布帖』が日本民芸協会から出版された。

この記念すべき外村の作品集『葛布帖』に対して柳は、「因縁あって掛川の隣

の宿の袋井で、外村君が仕事を再び昔に呼び戻した。葛布の歴史にとっては何たる幸ひなことか。幾代かを経たらきっと中興の主として永く人々から感謝されるであらう。それがどんな仕事であるかは、何よりもこの『葛布帖』一冊が語る。こんなにも一人で多種の色や柄を生み出した葛布の織手は、昔にもなかったのではあるまいか。召されて選んだ外村君の職はイエスの道を説く牧師である。だが法と美との域に何の隔りがあらう。志を立てて織物の海原に帆を上げてから何年にならうか。幾海涯からの航路を終へて今や一つの港に錨を下ろしたのである。この書物はその旅の日誌とも思へる」と、きわめて高い評価を与えている⁽³⁰⁾。

葛布との出会いによって織物作家として新たな境地を切りひらいた外村にとって、ここでもう一つの民芸運動への重要な貢献について言及しなければならないであろう。それは、民芸運動を協団として形成する課題を、西ヶ崎及び袋井の教会工房の働きを通して遂行しつつあるということである。民芸運動にとっての協団の重要な役割については、既に柳は1927年に「工芸の協団に関する一提案」という文章で強調し、実際に上加茂協団が実験的に結成されたが、わずか二年で座礁してしまった失敗の経験がある。しかし、柳にとってこの協団の理念は、民芸運動の基本に関わるもの故に、断念することなく、静岡での外村の働きにその理念を託している模様が、外村宛の膨大な書簡から窺える。例えば1931年6月の書簡の中で柳は、「小生の考へでは将来の工芸はどうあっても協団を必要とすると考へるのです。小生上加茂の事で苦い経験を有っていますが、仕事の結果からすると、それが非常な成功であった事を疑ひません。凡ての蹉跌は全く人事問題にあったのです。人間の道徳的力の弱さをつくづく経験しました。併し小生は尚協団と云ふ理念を放棄しないものです。そのみが工芸を正当に育てると云ふ信念を失っていません。それで其再起を機会さへあれば企てたいと考へています。……残る唯一の道は理解し合って協団を作り、協団の名で仕事をするより道はないかとも考へられます」と、情熱をこめて語っているのである⁽³¹⁾。

1934年には、既に静岡民芸協会が始まっていて東京から柳宗悦を招いて静岡

機織る伝道者—外村吉之介論

市に春秋の講演会を開いている。度毎の瑞々しい美の話に誰もが心を躍らせたのである。

最後に、外村自身の伝道者としての自覚と織物を織る民芸家としての自覚の問題であるが、両者はどのように結び合っていたのであろうか。袋井教会時代の初期に、外村は、「私にとって伝道することと機を織ることとは二つではありません。信仰の暮らしと工芸の働きとは神の御働きかけの中であって、一如であります」と、両者の不即不離の関係について述べている⁽³²⁾。神の働きかけにおいて、伝道者としての働きと機織る働きとが不可分の関係として自覚されているという点は重要な事柄であろう。この点で、想起されるのは、初代教会の伝道者パウロの生き方であるが、使徒言行録18章によれば、パウロとアクラ(更にはその妻プリスキラ)の職業は天幕づくりであった。「天幕」は大部分皮製であったことから、より広義の鞣皮業者あるいは革細工業者を意味するものと推測される⁽³³⁾。パウロは、その伝道活動において、この職によって自らの生活の糧を得、諸教会に迷惑をかけることを意識的に避けようとしたと推定できる。機織る伝道者としての外村の深い自覚に、この職人であり、伝道者であったパウロの姿が、一つのモデルとしてあったと言ってさしつかえないであろう。

【 3 】 沖縄の民芸と共に

外村吉之介の民芸運動への参与という点で言及しなければならないのは、沖縄の民芸との関係である。沖縄の民芸との出会いは、日本民芸運動の歴史において大きな意義をもっていたのみならず、外村の歩みにとってもそれは決定的な意味をもっていたと言えるであろう。

1939年3月、日本民芸協会の柳宗悦・兼子夫妻、浜田庄司、芹沢銈介、外村吉之介、田中俊雄、柳悦孝、少し遅れて河井寛次郎、岡村吉右衛門の計9名が、神戸から船で沖縄へ向かう。何故、沖縄に行くのかという事情について、柳は、前年の暮から新年にかけて沖縄に滞在した経験から、「今の工芸は色々の点で退歩して了ったところが多い。此のことは改めて琉球を見直し、そこに学ぶ可き多くのものを持つことにならう。色々の意味で琉球の工芸は吾々のそれより遙

かに優れた仕事をしている」と記し、何よりも琉球の工芸に学び、その保存と発展の助力をし、琉球工芸を幅広く紹介する目的について述べている⁽³⁴⁾。

「美の王国」と伝え聞いていた沖縄の土を初めて踏みしめた感銘を、外村は、その執筆担当した「日本民芸協会同人 琉球日記」の中で、「街は賑かである。道行く女の人々は多く琉装をして、前に帯を結び、被衣を寛かに着流している。古風な髷とかんざし、古い王朝時代の風姿を、今この目前に見るようである。路は石灰質の白い細い肌理、どんな小さな家でも本葺の立派な、赤瓦に白い漆喰の屋根、その棟割りの線の変化や強さ。家を囲む石垣、道路は狭く、涯しく曲って、歩けども倦きずに歩ける。ああ、今日この日本にこんな所がまだ保たれて居ったのか。その憧れの美の王国に、仕事しようとして私等は今暮しを初めようとしているのか」⁽³⁵⁾と、描写している。約二ヶ月に及ぶ沖縄滞在の間、柳宗悦は全体を統率し、あらゆる人文の探求や講演をなし、陶工の浜田庄司と河井寛次郎は壺屋の新垣栄徳の窯場で、染工の芹沢銈介と岡村吉右衛門は首里の瀬名波や那覇の知念染場で、織工の外村吉之介と柳悦孝は首里内外の織女たちの許に、そして田中俊雄は図書館に通って、それぞれ調査と研鑽に励んでいる。

既に本土の側から柳田国男などの知識人が学術的関心から調査に沖縄を訪れてはいたが、沖縄の文化それものに対して本土の側から深い敬意を払って高く評価し、謙虚に「琉球の富」に学んだのは、民芸協会の同人が初めてであったであろう。民芸協会の同人は、翌年にも調査と研鑽のため沖縄に滞在しているが、その成果は、それぞれの作品に反映していることは疑い得ないことである。また「琉球特集」として、『工芸』に三回、『月刊民芸』に二回の特集が組まれている⁽³⁶⁾。

外村が、沖縄滞在を通して何を考え、何を学んだかについては、先述の「琉球日記」の中でも述べているが、『工芸』の琉球特集において「琉球の民歌」、「琉球の織物について」、また『月刊民芸』の琉球特集において「琉球の近道」、「琉球の芝居」、「久米島だより」、「琉球の友へ」などを執筆している中に窺うことができる⁽³⁷⁾。その中でも、「琉球の民歌」は、琉球の民衆の中から生ま

機織る伝道者—外村吉之介論

れ、民衆の中に深く親しまれてきた歌を紹介したものであるが、その後も琉球の民歌が、外村自身の歩みの中で深く親しまれて行く契機となった研究として重要なものであろう。

また「琉球の織物について」は、特に外村自身が集中して調査してきただけあって、長くはない論稿とはいえ、内容の豊かな文章である。例えば、「衣服に於ては琉球は、まさに美の王国といへやう。織りの材料として絹、芭蕉、麻等に恵まれ、本染々料として福木（黄色）、てかち（茶）、山藍（青系統）を与へられ、手法として厚い伝統を受けて布を作るだけでなく、衣服に仕立ててからの取扱ふに到るまで、周到な知恵を授けていることは羨むべく、尊むべき限りである」と、語られる⁽³⁸⁾。琉球には、昔から有名な宮古島の紺緋、八重山の白緋、久米島の紬、首里の芭蕉布や紬類、大宜味の芭蕉布、読谷山の花織等のようなさまざまな材料の織物が作られてきたが、とりわけ、琉球の織物の美しさを語るものはその緋にほかならない。外村によれば、「琉球の緋は実に簡素な美しさを以て世界に冠たる存在である。そして、それ故にこそ工芸の美の法則がもっともよく語られているのである」⁽³⁹⁾と、指摘される。そして、「見渡してみると琉球の織物の美しさは縞も、花織も、やしらみも何れも緋と同じ法の守りの中であって、多彩であっても傲らず、単色であっても温い。複雑に見えても技巧的でなく、単純であっても豊かである。一つ一つの言葉があって心の欣びを溢れさせてくれる。琉球の織物に目を閉ぢることはわれわれの生活をほとんど失ふこととならう」⁽⁴⁰⁾と、琉球の織物に対して手放しの賛辞が語られているのである。

民芸協会同人の沖縄滞在との関連で、見落としてならない大きな出来事は、いわゆる「方言問題論争」であった。それは二回目の沖縄訪問の際に起こった出来事で、沖縄県学務部が琉球方言の廃止を政策として打ち出したことに対して、民芸協会あげて論争を挑んだものであるが、既に1939年の最初の滞在においてこの問題は表面化していた。沖縄の知識階層の人々とのある座談会で、柳宗悦が、琉装と沖縄口の制限や廃止奨励ほど理解できないことはない、と語ったことに対して、会衆から批判が続出したのである。この批判をめぐって、『琉

球日記』の中で外村は、「われわれは何も標準語を止めろといっているのではない。之は徹底的に習得なさるがよろしい。しかし、その為は何故沖縄口を廃止しなければならないのか。大和言葉を今日、もっともよく保存して、古語の研究に生きた材料を供し、語るに美しいこの言葉を何故捨てねばならないのか」と、語った河井寛次郎の反論を紹介している⁽⁴¹⁾。

沖縄県学務部の基本的な主張は、「敢て縣民に訴ふ 民芸運動に迷ふな」と題する文章に盛り込まれている。そこではまず、「意義深き皇紀二千六百年を迎へ真に挙縣一致縣民生活の各般に亘り改善刷新を断行して此の歴史的聖業を翼賛し奉ねばならぬ。就中標準語励行は、今や挙縣一大縣民の運動として着々実績を収めつつある所である」⁽⁴²⁾と、標準語励行運動が、戦時体制における「歴史的聖業」の一環であると主張される。そして、民芸協会の言動に批判的に言及しながら、「標準語普及運動が軌道に乗り漸く物心両面に黎明を見つつある時、一方に於て本運動の進展を阻止するが如き見解を発表する向もあるが、其の殆んど全部が外来者の阿諛的言辞であつたり、或は枝葉末節の方法論であってもとより取るに足らぬものではあるが、最近或る有力なる民芸家はその特殊な視野より縣の標準語奨励は行き過ぎであるとか、伝統的な美や特徴を保存するために、或は将来の日本語の標準決定するためにも標準語奨励は考へものだと述べて居らるる様であるが、それは本縣振興を衷心念願する者のとらざる所である」⁽⁴³⁾と、断固とした学務部の見解を表明している。

これに対して、柳宗悦は、「国語問題に関し沖縄県学務部に応ふるの書」において、「標準語も沖縄語も共に日本の国語である。一方が中央語たるに対し、一方は地方語である。是等二つのものは常に密接な関係を有し、国語として共に尊重せらる可きであると云ふのが吾々の見解である。吾々は未だ嘗て中央語たる標準語が地方にとって不必要であると述べたことはない。それが公用語として如何に大切であるかは寧ろ常識に属する。たとへ地方を異にすると、凡ての日本人が共有の一用語を有することは日本国民としての悦ばしい任務である。……だが同時に之が地方語への閑却となり、ややもすれば侮蔑となり、抑圧となるなら大きな誤りである。地方語も亦国語の大切な一要素であるのを忘れて

機織る伝道者——外村吉之介論

ならぬ」⁽⁴⁴⁾と、琉球語廃止を伴う標準語励行運動を批判している。

それぞれの文化にすぐれた点を見出し、文化の優劣の序列化を拒否する「文化相対主義」は、松井健が指摘するように、今日の「文化人類学の基本的な方法概念であるが、柳が昭和15, 6年という時代に、確かな具体的視察からこの立場に到達していたことは驚異といわねばならない」のであり、その「考え方のなかに、当時の国体イデオロギーを危うくする棘が潜んでいた」と言えるのである⁽⁴⁵⁾。

その後民芸協会は、雑誌『工芸』や『月刊民芸』において、この「方言問題論争」の特集を組み、本土において幅広く知識人をまきこみ、論争を展開している⁽⁴⁶⁾。柳にとって、このような形でペンを執るのは、朝鮮問題に対する発言以降、二度目のことであるが、どちらにも共通している点は、困難な状況にある朝鮮民族及び沖縄の人々に対する人間としての敬意に根ざし、破壊に直面している異質な文化の擁護を訴えている点であろう。

外村自身も、この論争の一端に与することになるが、彼の主たる関心は、琉球の文化を、その民歌や織物、芝居や舞踏などの調査をふまえて積極的に評価する点にある。例えば、「琉球の友へ」という一文の中では、琉球の文芸復興という観点から、「私は琉球の文芸復興を夢みる。琉球の中にひそむ醇厚、雄渾な文芸や工芸の真価が更に発揚されるのを俟つのである。この日を想はせる鍵は回顧的な復古主義の手中にも、ことの詮索に終始する考証家の手中にも委ねられていない。琉球の有つもののよさに直接に触れてそれに対する敬愛者こそ、その鍵を握っていると信ずる。友よ。我々が琉球に生れ、沖縄口を母語とし、琉球の子弟と共に生きて、歌ひ且つ踊り、やがてあの琉球の墓に入り行く身の上であることを心より羨しく思ふ」と、呼びかけている⁽⁴⁷⁾。

民芸協会の沖縄の言語問題に対する論争的関与で重要な点は、それが一時的な関心で終わったのではなく、戦後においても一貫して沖縄の文化を中心に関わっていることである。例えば、1956年の『民芸』（45号）では「沖縄の問題」を特集し、政治的問題を視野にいれながら、沖縄の民芸の状況について報告され⁽⁴⁸⁾、また翌年の57年には、河井寛次郎を団長として民芸視察団が沖縄を訪問

し、さまざまな交流が行われている⁽⁴⁹⁾。さらに特筆すべきは、65年に日本民芸協会が「沖縄民芸の保護に関する陳情書」を、日本政府閣僚、米国の沖縄大使・公使、沖縄の行政責任者に対して提出したことであろう。そこでは、沖縄民芸の危機的な状況に言及され、「もし、このままに放置するならば、香り高い民族の伝統の灯は外来観光客の低俗な趣味と購買力のもとに消え果てるかも知れない。われわれはこの沖縄文化を護りつづけ、更にこれを深め高めるために上下力を用うべき時に到っている。沖縄経済援助に関する日米協力の推進が伝えられていることはもとより歓迎される所であるが、その援助の効果が沖縄住民の真実の幸福に役立つよう計画され、いやしくも沖縄民衆古来の民族文化の伝統に対する無理解な軽視や破壊を伴わないことを切に要望するものである」と、訴えられているのである⁽⁵⁰⁾。そして、沖縄復帰後、74年には日本民芸館・沖縄分館が、那覇市の琉球大学の側で開設され、沖縄における民芸運動展開の重要な拠点がすえられたのである。

外村吉之介の場合、戦後における沖縄の民芸との関わりは、より親密で深いものとなっている。戦後直後、倉敷の紡績工場に来ていた沖縄の女性達が、大原総一郎の配慮で織物を習得することになるが、その際沖縄の伝統ある織物の指導に当たったのが外村であった。その中の一人に、後に芭蕉布で人間国宝となった平良敏子もいたのである⁽⁵¹⁾。

さらに沖縄の人々とその民芸への思いが抑えがたいものとなり、外村は1957年から58年にかけて、沖縄本島、久米島、宮古島、石垣島、竹富島、奄美大島などを民芸の調査研究のため訪れている。その調査研究の成果は、『沖縄の民芸』という著書となってまとめられているが、そこには琉球列島における絹織物、麻布、木綿物、芭蕉布、染物、焼物、木工品、竹草工などの豊かな民芸の富が描写されている。同時に戦争における余りに大きな犠牲について、外村は、「沖縄が日本全土の防壁となり、測り知れぬ犠牲を払ったことはまさに断腸の最大凶事であった。無数の若き男女と共に世界無比の人類の至宝が地上から壊滅したのである。そして、その後に又新しい苦難の歴史がはじまった。そういう中で沖縄の人たちが、どんなに生きているか、それを見、教わりたいと久しく思っ

機織る伝道者―外村吉之介論

た。そして遂に往って書いたのがこの通信である。私の仕事である染織のこと民芸品のことがおのづから主題であるけれども、古くから『孤島苦の琉球』といわれつづけてきた事情が、今もつづいている姿に十分目をとめた。それが私の心の課題であった。結果は何も解決を見出したのではない。むしろ歴史について人生について考えさせられたのである」と述べている⁽⁵²⁾。

外村にとって、「孤島苦の琉球」が「私の心の課題」として継承され、その後いわゆる「沖縄復帰」に際し、その反省は次のような表明の中に反映されているのである。「沖縄の復帰、内地との合一が叫び求められているとき、一体どこへ復帰し合一すべきものであろうか。苦難の中にも内に蔵するもの深く勁い沖縄を、ただ物量の繁栄と安逸に耽ける浅はかな内地へ復帰さすべきであらうか。新しがりときれいごとの芸術や生活の内地へ、沖縄の美しい技術や生活が合一すべきであらうか。沖縄が本土に復帰するのではない。本土が沖縄に復帰すべきである。物が豊かなところなのではない。生の豊かな、志の豊かな真実や美の王国、そこへの復帰である」⁽⁵³⁾。

【4】美と信の使徒として

最後に、外村における民芸論とキリスト教について考察したいと思うが、それに先だって、戦後の民芸運動への参与と貢献を素描しておきたい。戦後の外村吉之介の新たな出発は、倉敷から始まっている。戦禍から逃れて福井県大野に移っていた外村を、柳は倉敷の民芸運動の大原総一郎に推薦し、外村は家族と共に1946年に倉敷に移住している。倉敷における外村の働きの第一歩は、同年に大原を会長として、岡山県民芸協会創立に尽力し、二年後の48年には倉敷民芸館を設立して館長に就任したところから始まっている。この民芸館は、東京駒場の日本民芸館に次ぐ第二の運動の拠点となるものであった。53年には、倉敷民芸館附属工芸研究所（後に倉敷本染手織研究所と改称）を自宅に創設し、夫人と共に民芸美論と本染手織り技術を指導し、工人育成に努めている。

既述のように、1957年の11月、外村は沖縄全島を50日間旅行し、沖縄民芸の調査、指導、蒐集に努力している。65年には熊本国際民芸館の創設に関わり、

館長に就任し、また同年、東予民芸館（現、愛媛民芸館）創立に、さらに74年には出雲民芸館の創立に協力している。

民芸運動の展開において、外村が国際的視野をもって、1959年の10月より半年間、北米と欧州の14ヶ国を訪問、西洋民芸品多数を初めて日本にもたらしたと言える。続いて66年、72年、77年の三回欧米に渡り、工芸文化の国際交流に寄与し⁽⁵⁴⁾、また、68年には世界工芸会議第三回大会（ペルー・リマ市）に日本代表として出席して、「日本の民芸」について講演している。さらに74年には、韓国を訪問し、韓国民芸協会の成立に関わり⁽⁵⁵⁾、84年には、インドの民芸の調査、蒐集に当たっている。

戦後の民芸運動の推進のために、文字通り指導的な役割を果たしてきたと言えるが、わけでも外村の独創的な運動の展開方法は、日本民芸夏期学校の創設と少年民芸館の推進に顕著に窺える。1973年8月に、「日本民芸青年夏期学校」（後に「日本民芸夏期学校」に改称）が創設されているが、外村は、その動機について、「日本民芸運動は今や満50年に達して一つの転機ににきている。初期からその美論を奉じた者たちも永い余命を約束されぬ時に達し、しかも彼等の永い苦節がふみにじられて、民芸の名が乱用され、その真意が世情の中に風化しようとしているのである。しかし、それらはむしろ、新たに若い世代の自覚と努力を求める契機にきたものと見るべきである」⁽⁵⁶⁾と、述べている。以降、毎年夏、全国四会場で日本民芸協会の最大の年中行事として実施され、外村自身、毎年講師を務めてきている。

工芸の教育への外村の貢献としてもう一つあげられるのが、84年に『少年民芸館』が刊行されたことである。「この『少年民芸館は』、見せかけの駄目なもの、着飾った怠けもの、高くて威張っているような道具を捨て、健康で無駄がなく威張らない美しさを備えてよく働く、良い友だちをみなさんに紹介したいと思って、世界中の美しい工芸品を選んで並べました」と、その意図について述べている⁽⁵⁷⁾。また同年、出雲民芸館創立十周年記念として、「外村の少年民芸館展」が開催され、85年には岡山県民芸協会が『少年民芸館』を学校、図書館に贈る運動を始めている。さらに86年に、宮城県民芸協会二十周年記念に関か

機織る伝道者―外村吉之介論

れた「少年民芸館くらしの中の美展」、そして87年倉敷民芸館で「コレカラノビル少年少女のための民芸展」を開催する。民芸運動の度々の危機に直面して、民芸本来の真意を若い世代には夏期学校という形で、子どもたちには少年民芸館という形で提示しようとした中に、伝道者としての外村の賜物がいかんなく発揮されていると言えるであろう。

以上見てきたように、柳宗悦の『工芸の道』との出会い以降、外村は、戦前・戦時下は日本メソヂスト教会の牧師として、また戦後は倉敷民芸館の館長として民芸運動にその生涯を捧げて関わってきたと言える。そしてその根底を貫流している関心とは、まぎれもなく民芸とキリスト教との関係を内的に深く統合して理解し、実践することの一点にあったといつて過言ではないであろう。

民芸における「美」とキリスト教における「信」との両者を内的に統合して捉える外村の理解は、柳の『工芸の道』に由来するものであるが、既述のように袋井教会の初期の時代には、この両者の関係について、「私にとって伝道することと機を織ることとは二つではありません。信仰の暮らしと工芸の働きとは神の御働きかけの中であって、一如であります」⁽⁵⁸⁾と、表現されている。換言すれば、外村にとって、伝道・牧会のために牧師として働くことと、機を織る織工としての働きは、双方とも「神の御働き」、今日的に言えば、「神の宣教」*missio Dei* に共に参与することに他ならない。その点に触れて、河井寛次郎は、「外村君が牧師として同時に織工である事は一見不思議の様であるが実は不思議でも何でもない。同君の場合では人に注がれるものと同じものが物に注がれて居るだけの事なのである。人の心の中に咲き返るものが物の中にも咲き出して来ただけの事なのである」⁽⁵⁹⁾と、適切に評している。

ところで、民芸が、いわゆる近世の美術と基本的に一線を画す点は、美術が鑑賞される美であるのに対して、民芸は用いられて輝く美、即ち「用美」であることであった。「基督教芸術に関する音信」の中で、外村は、この「用美」という民芸の基準に即して、美術の美を「三人称的」表現、他方、民芸の美を「二人称的」表現に区別している。そして、その「二人称的なもの」を「礼拝的な

もの」と呼び、それは、「眺めるものでなくして拝むもの。作者の興味からではなくして、拝む暮しからの現れである。具体的にいへば聖像も十字架も会堂も凡て其前や中に立つ者をして拝ましめ、懺悔、悔改せしめ、信頼と帰依の念を有たしむる、礼拝の用に即したものでなくてはならぬ。此の重要な要素の欠亡が近世の宗教芸術の無力の根本ではないか」⁽⁶⁰⁾と、述べている。民芸を通して外村が目指した大切な事柄の一つは、民芸の「用美」の思想に根ざした礼拝に仕える芸術の復権という点にあったと言えるであろう。そこには、ヨーロッパ中世における卓越した芸術が、ことごとく神の栄光を表す教会堂とそこにおける礼拝に共同で仕えるという、宗教芸術の理想像を反映しているのである。この点は、『我思ふ』好みや自由に走る者なく、皆共に神に帰し、神を拝む暮し仲間として畏れ喜ぶ仕事を励んだ。個人の力は協団に帰納せられてこそ処を得、真価を発したのである。それ故この時代の何れのものにも作者の銘を見出すことは出来ない。記念すべきものは人の名ではなくして、神の聖名であった」と、語られる⁽⁶¹⁾。

キリスト教信仰を基礎にすえつつ、民芸運動に関与することを使命とする外村にとって、もう一つ重要で、根本的な問題は、どこでその運動を担い、推進するかという場の問題であった。先述のように、この問題に一つの大切な示唆となるのは、1931年に柳宗悦から手紙で提示された委託であった。「小生の考へでは将来の工芸はどうあっても協団を必要とすると考へるのです。小生上加茂の事で苦い経験を有っていますが、仕事の結果からすると、それが非常な成功であった事を疑ひません。凡ての蹉跌は全く人事問題にあったのです。人間の道徳的力の弱さをつくづく経験しました。併し小生は尚協団と云ふ理念を放棄しないのです。それのみが工芸を正当に育てると云ふ信念を失っていません。それで其再起を機会さへあれば企てたいと考へています。……残る唯一の道は理解し合って協団を作り、協団の名で仕事をするより道はないかとも考へられます」⁽⁶²⁾。

この「協団」の理念は、その後民芸「協会」というかたちで展開を見ることになるが、牧師としての外村の自覚は、その中核に教会工房があったことは、

機織る伝道者―外村吉之介論

次のような言葉にも表れている。「自らの力なく、知識なく、徳がなくても、神の働きかけによって救ひの世界に置かれますやうに、美しさの世界でも、この無能な者が生かされ用ひられる。よい状態に在っては、無名の職人たちがかくも美しいものを作って居る。そこに自分を托したいと発心したからであります。実際はまだ之からですが私は教会の協同体としての仕事をものにしたいと、それを大事な課題として苦心して居ります」⁽⁶³⁾。

戦後、教会の牧師を辞し、倉敷民芸館の館長となった外村にとって、その協同体は民芸館と言えるが、わけてもその中心に生活共同体を基盤とした工芸研究所があったと言えるであろう。工芸研究所の趣意書には、「倉敷民芸館は付属工芸研究所をもっていて、毎年数名の研究生を入れている。設備は小さく、手織機九台と手紡車をもち、染め場があるだけである。しかし、小規模だから、技術の伝習にも、精神の養成にも、昔の塾のような親しみがあり、暮らし方の指導まで、言わず語らずのうちにできるのである」⁽⁶⁴⁾と、記されている。

40年以上続けられ、230名を超す織物の指導者を全国各地に送り続けてきた外村の地道な働きについて、柳は、「自宅の工房にいつも内弟子の二、三人を置いて、年々卒業生を出す施設を設けて、もう幾人かの人々が各地方に帰って仕事をしています。之は何も地方民芸と作家との直接のつながりではありませんが、地方に正しい種を蒔く仕事として、大いに賞讃されてよい努力だと思います」⁽⁶⁵⁾と、民芸運動推進の一つのモデル的あり方として評価している。研究所における共同生活では、実際に織工としての専門的な技術指導のみならず、柳宗悦の民芸理論の講義も行なわれ、折々に聖書の話も語られたようである。そこには、P. ティリッヒの「潜在的な教会」と呼ぶことのできる共同体の姿を見ることができるのであろう⁽⁶⁶⁾。

さらに民芸とキリスト教との関係をめぐる外村の貢献として、教会建築をあげることができるであろう。民芸協会が、1941年に日本のプロテスタント教会の指導者たちの訪問をうけて「宗教と工芸について」という対談を行っている。戦時下における日本的キリスト教が提唱され始めている中、外村は、「今日の日本の基督教の大きな課題としまでも日本的神学といふものを無理に観念的に

こちつけて拵へることは根本的に誤っていると思ふ」⁽⁶⁷⁾と、イデオロギーとしての日本的神学を批判している。しかし同時に、日本における教会建築や礼拝の在り方に対して、強い関心と共同の研究会を提案し、柳も、教会建築に関わることは、「民芸館の使命でもあります」と語っている⁽⁶⁸⁾。プロテスタント教会において教会建築がほとんど関心がなく、また乏しかった会堂の時代に、柳や外村などの同人が教会建築に強い関心を示した背景に、W. モリスを中心とした英国のハンドクラフト運動があったと言えるであろう⁽⁶⁹⁾。

既に、最初の教会の任地である山口教会時代から教会の工芸と建築への関心は芽生えており、礼拝に仕える献金や花瓶を置く小卓の設計を柳に依頼し、現在でも教会で使用されている。また、外村は、十字架のデザインによる屏風や布の製作にも着手しており、彼自身の葬儀の際にも用いられている⁽⁷⁰⁾。外村が教会建築の設計に関わった例として、日本基督教団西条栄光教会と民芸風の牧師館の設計があげられるが、それは今日も地域の人々にも愛され親しまれている教会建築である⁽⁷²⁾。

さらに1963年の夏、京都の日本聖公会の聖ヨハネ教会、取り壊しの危機に直面し、その知らせを耳にした外村が、取り壊しを阻止するために行動を起こし、教会は明治村に国の重要文化財として指定・保存されることになった事例も看過できないであろう。この出来事をふりかえり、外村は、「私はこの下煉瓦上木造の設計は、審美的な構想によるものだと、かねがね確く思っていた。それは、姿態の結果からだけの見解かも知れないが、実はこれが今日明治村に移築されている最大の要素なのである。先に述べた、この建築の危機一髪に際して、その存続のために、即刻に、一途に奔走したのは、一にその美しい姿が亡ぼし去られることの悲しみに耐えかねたからである」⁽⁷²⁾と、回顧している。

最後に、外村における民芸とキリスト教との関係で、言及しなければならないのは、外村の生涯と働き全体の根底を貫流するモットー「木綿往生」についてである。1992年、外村は岡山県文化賞を受賞しているが、その記念講演「愛の三つの相について」の中で、この生涯のモットーについて次のように語っている。「私の考えでは、人類に与えられている繊維の中で木綿は最高の存在だと

機織る伝道者—外村吉之介論

思います。最も有用であります。生まれてから死ぬまで、私共は木綿の厄介になっています。……私共の倉敷本染手織研究所では、その仕事のモットーとして『木綿往生』というのを掲げております。木綿は今申したように、様々なお役に立った後は雑巾になって一生を終わります。雑巾になりますと、バケツの中で揉まれ絞られて、板の間や廊下を拭き家具の隅を拭きます。そしてボロになって生命を終わります。……そういう往生をしようと言うのが私共の願いであります。……バケツの中で、揉まれ絞られて世に役立つようにと、アガペこそ、木綿から教えられる私共の仕事でございます」⁽⁷³⁾。

「愛の三つの相について」とは、ギリシャ語のエロース、フィリア、アガペーのことであるが、「バケツの中で、揉まれ絞られて世に役立つ」愛の相とは、聖書におけるアガペー、神の愛にほかならない。その愛は、外村が最も愛読していた旧約のイザヤ書53章4—5節では、「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」と、表現され、新約のイエス・キリストの生涯が指示されている。「木綿往生」を指標として生きる外村吉之介の生き方とは、旧約において苦難の僕として預言されたイエスに従って生きる歩みに他ならず、そこに「美と信の使徒」外村の真髓を窺うことができるのである。

結 び

以上、外村吉之介の生涯と思想をめぐり、伝道者としての献身にいたるまでの道、また柳宗悦の『工芸の道』と出会い日本メソヂスト教会の牧師として民芸運動に参加してきた歩み、さらに沖縄の民芸との出会いと関わり、そして戦後の倉敷民芸館を拠点とした民芸運動展開における指導的な役割とその背景をなす民芸運動とキリスト教との思想的関係について一考察を試みてきた。

日本のプロテスタント教会にとって、これまで視覚芸術との関係は周辺化されてきた中で、民芸運動への参与を通して、今日世界的にも注目されている教会建築や教会工芸の領域で、機織る伝道者外村の思想と実践は、まさに先駆的な貢献を果たしてきたと言えるであろう。しかも本稿において外村における民芸運動とキリスト教の関係を考察することは、東アジアを背景とした日本の文化風土における福音の受肉の課題をめぐる宣教神学の一つの可能性を探る試論とも言えるであろう。

【注】

- (1) 司馬遼太郎「倉敷・生きている民芸」(『古往今来』中公文庫 1983年 改版 1996年 127頁)。
- (2) 唯一の例外的な研究として、竹中正夫が、『倉敷の文化とキリスト教』(日本キリスト教団出版局 1979年)の中の「聖書と民芸」の章において外村吉之介の働きに言及しているが、必ずしも資料的に十分とは言えず、外村の歩みに即した研究という訳でははない。
- (3) 外村吉之介「五箇山に道を辿る」(『喜びの美・亡びの美—民芸六十年』講談社 1988年 89頁)。
- (4) 『日本メソヂスト教会西部年会記録』(1921年 46—47頁) 参照。
- (5) 『クレセント』(第21号 1986年 32頁)。
- (6) 「神学部に関する T. H. ヘーデン報告 1925年 (1924年度)」(英文『関西学院百年史 資料編 I』関西学院 1994年 223—224頁)。
- (7) 同 掲 書 224頁。
- (8) 式場隆三郎「西ヶ崎の教会工房」(『工芸』38号 1934年 2頁) からの引用。
- (9) 「美について—一つの懺悔録」(『福音と思想』4月号 第1巻第6号 山口福音と思想社 1930年 16頁)。
- (10) 『京都 YMCA 七十年史』(京都キリスト教青年会 1975年 157—158頁)。

機織る伝道者—外村吉之介論

- (11) 外村吉之介「あとがき」(『民芸遍歴』1969年 朝日新聞社 299—300頁)。
- (12) マックス・スチルネル『自我経(唯一者と其所有)』(辻潤訳 冬夏社 1921年 660頁)。
- (13) 魚木忠一「近世新教神学思想発展の一考察」(『基督教研究』第5巻第1号 1927年11月 31—52頁)、同「〈神の言〉に関するカール・バルトの思想」(『基督教研究』第5巻第3号 1928年7月 417—444頁)。
- (14) 魚木忠一「近世新教神学思想発展の一考察」(『基督教研究』第5巻第1号 1927年 47頁)。
- (15) 『柳宗悦全集 第八巻』(筑摩書房 1980年 91頁)。なお、柳の『工芸の道』をめぐっては、拙稿「初期柳宗悦における宗教論と民芸論」(『基督教論集』2001年3月)を参照。
- (16) 外村吉之介「民芸の父を訪ねたころ」(蝦名則編『回想の柳宗悦』1979年 八潮書店 82—83頁)。
- (17) 「山陽部報告 部長白戸良作」(『日本メソヂスト教会第24回西部年会記録』1931年 3月18日—23日 111頁)。
- (18) 『高き櫓』(日本メソヂスト山口教会月報 1930年9月 1932年1月)を参照。
- (19) 外村吉之介「美について—一つの懺悔録」(『福音と思想』4—5月号)
- (20) 『高き櫓』(1931年12月)。実際に、柳が図案を作成し、鳥取の吉田璋也を通して注文した経緯は、柳からの書簡(1931年10月28日、11月7日、28日)からも窺える(『柳宗悦全集』21巻上 455—457頁)。
- (21) 柳の紹介文については、1931年3月11日の柳からの手紙を参照(『柳宗悦全集』21巻上 419頁)。「京城」という表現は日本の植民地主義時代の問題ある表現であるが、歴史的表現として記載する。なお、浅川巧の生涯と思想については、拙稿「朝鮮の土となった日本人キリスト者—浅川巧の足跡を求めて」(『関西学院大学人権研究』創刊号 1998年3月)を参照。
- (22) 『高き櫓』(日本メソヂスト山口教会月報17号 1931年4月 4頁)。
- (23) 1931年6月24日の柳からの手紙を参照(『柳宗悦全集』21巻上 431—432頁)。

- 頁)。
- (24) 「静岡部報告 部長矢内哲」『日本メソヂスト教会 第27回東部西部年会記録』1934年 100頁)。
 - (25) 『柳宗悦全集』21巻上 488頁。
 - (26) 式場隆三郎「西ヶ崎の教会工房」(『工芸』38号 1934年 1—2頁)。
 - (27) 「静岡部報告 部長矢内哲」(『日本メソヂスト教会 第28回東部西部年会記録』1935年 123頁)。
 - (28) 外村吉之介「遠江袋井から越前大野へ」(外村吉之介『日々美の喜び—民芸五十年』講談社 1980年 226頁)。
 - (29) 外村吉之介「掛川の葛布」(『工芸』第45号 1934年9月 59頁)。
 - (30) 柳宗悦「外村吉之介著『葛布帖』跋文」(柳宗悦『私の念願』春秋社 1978年 308頁)。
 - (31) 柳宗悦の1931年6月28日の手紙を参照(『柳宗悦全集』21巻上 431—432頁)。
 - (32) 小冊子『信仰と工芸』(袋井時代の初期、大月一清編「外村吉之介年譜」『民芸』486号 1993年6月 24頁)。
 - (33) R. F. ホック『天幕づくりパウローその伝道の社会学的考察』(日本キリスト教団出版局 1990年 40頁)。
 - (34) 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」(『月刊民芸』第1号 1939年4月 3—5頁)。
 - (35) 「琉球日記」(『月刊民芸』第2号 1939年5月 41頁)。日本民芸協会同人「琉球日記」(『月刊民芸』第2号—11号：1939年5月—40年2月)は、前半が外村吉之介、後半は田中俊雄が担当している。
 - (36) 『工芸』：第99号(琉球特集)1939年10月、第100号(琉球特集)1940年10月、第103号(琉球特集)1940年10月；『月刊民芸』：第8号(琉球特集)1939年11月、第12号(琉球特集)1940年3月。
 - (37) 外村吉之介「琉球の民歌」、「琉球の織物について」(『工芸』第100号、1939年10月30日)、「琉球の近道」、「久米島だより」(『月刊民芸』琉球 第8号、

機織る伝道者—外村吉之介論

1939年11月)。

- (38) 外村吉之介「琉球の織物について」(『工芸』第100号 1939年10月30日 137頁)。
- (39) 同掲書 138頁。
- (40) 同掲書 140頁。
- (41) 「琉球日記」第四回 4月21日(『月刊民芸』第5号 1939年8月 52頁)。
- (42) 沖縄縣学務部「敢て縣民に訴ふ 民芸運動に迷ふな」(『月刊民芸』第3号 1940年3月 20頁)。
- (43) 柳宗悦「沖縄縣学務部に応ふるの書」(『月刊民芸』第3号 1940年3月 21頁)。
- (44) 同掲書 23頁。
- (45) 松井健「解題 文化としての民芸」(式場隆三郎『琉球の文化 復刻版』榕樹社 1995年 viii—ix)。
- (46) 『月刊民芸』第14号(沖縄言語問題特集) 1940年5月、第20/21号(沖縄言語問題特集) 1940年11/12月。
- (47) 外村吉之介「琉球の友へ—琉球文芸復興を思ふ—」(「日本文化と琉球の問題」特集『月刊民芸』12号、1940年3月、40頁)。
- (48) 『民芸』45号 1956年9月号に「沖縄の問題」の特集。
- (49) 『民芸』55号 1957年7月号に特集。
- (50) 日本民芸協会「沖縄民芸の保護に関する陳情書」(『民芸』1965年 46頁)
- (51) 平良敏子「喜如嘉の芭蕉布」(『染織の美』第18号 1982年8月 81頁)。また、澤地久枝『琉球布紀行』(新潮社 2000年 142頁)を参照。
- (52) 外村吉之介『沖縄の民芸』(倉敷民芸館 1962年 182頁)。
- (53) 外村吉之介「沖縄に帰れ」(『民芸遍歴』朝日新聞社 1969年 132—133頁)。
- (54) 外村吉之介『西欧の民芸』(東峰書房 1962年)、外村吉之介、浜田庄司、芹沢銈介『世界の民芸』1972年)を参照。

- (55) 外村吉之介「韓国工芸の旅」(『民芸』260号 1974年8月 40—49頁)。
- (56) 外村吉之介「日本民芸青年夏期学校報告」(『民芸』268号 1975年4月 12頁)。
- (57) 外村吉之介『少年民芸館』(用美社 1984年 2頁)。
- (58) 小冊子『信仰と工芸』(大月一清編「外村吉之介年譜」『民芸』486号 1993年6月 24頁)。
- (59) 河井寛次郎「西ヶ崎の織物」(『工芸』38号 1934年2月 19頁)。
- (60) 外村吉之介「基督教芸術に関する音信」(『工芸』109号 79—80頁)。
- (61) 同掲書 81頁。
- (62) 『柳宗悦全集』(21巻上 431—432頁)。
- (63) 「宗教と工芸について」(『工芸』109号 1941年9月 21頁)。
- (64) 外村吉之介「風雪一丹青万」(『続・民芸遍歴』朝日新聞社 1974年 105頁)。
- (65) 柳宗悦「再度民芸と作家について」(『民芸』74号 1959年12月 5—6頁)。
- (66) P. Tillich, Systematische Theologie Bd. III, Stuttgart 1996, pp.427—428.
倉敷本染手織研究所については、実際に研究生であった白神久和子「木綿往生無地極上」、高田統子「半世紀に及ぶ御教えの恵み」(『民芸』486号 1993年6月 5頁、12頁)を参照。また、同様に研究生であった日本民芸館の
研究員横須賀雪枝の証言を参照。
- (67) 「宗教と工芸について」(『工芸』109号 1941年9月 22頁)。
- (68) 同掲書 23頁。
- (69) S. アダムス『アーツアンドクラフツ—ウィリアム・モリス以降の工芸芸術』(美術出版社 1989年)を参照。
- (70) 「祭壇は外村先生の習字『木綿往生』と、李朝民画『四瞳猛虎』が掛けられた囲炉裏のある部屋にしつらえられた。そして、紺の地に茶色の十字架模様が織り込まれた掛布を背にして、沖縄の珊瑚石のジーシガーミにお入りになった先生、その前に御写真、ヨーロッパの燭台一対、卓布に載せて

機織る伝道者－外村吉之介論

献じられた『工芸の道』初版本と聖書、二個の李朝白磁丸壺に活けた白鉄線や梅花うつぎ等の花で荘厳されていた。十字架布、卓布ともに先生の古い作」。(尾久彰三「告別式に参列して」『民芸』487号 1993年7月 55頁)

- (71) 西条栄光教会の教会建築については、『あゆみ 栄光五十年』(2000年 日本基督教団西条栄光教会 109頁)を参照。
- (72) 外村吉之介「聖ヨハネ教会危うかりき」(『続・民芸遍歴』朝日新聞社 1974年 123頁)。
- (73) 外村吉之介「愛の三つの相について」(『山陽民芸』168号 1992年6月 7頁)。